

シリーズ 3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン⑤

職藝学院

教授 渡邊美保子

ヒオウギ

ヒオウギは日本の山野に自生し、真夏に花を咲かせるおすすめの宿根草です。名前の由来は、平べったい刀のような葉が交互に重なり扇のように広がることから名づけられました。十二単の着物の襟元のように重なる葉の間から、長い茎を一本だけ天に伸ばしたその先に橙色の花をつける姿は、平安時代の女性貴族のような気高さを感じさせます。



No1.ヒオウギ:
草丈は1m程度。職藝学院宿根草実験ガーデン8月中旬。

ヒオウギの花は朝開いて夕方にはしぼんでしまう一日花ですが、一本の茎の先にたくさんのつぼみをつけ順番待ちをしていますので、長い間楽しむことができます。橙色の花びらの中に赤い斑点がある花は、あまり日本的な印象ではありませんが、らせん状にくるくるねじれて閉じていくはかない姿を見てみると、短い命に気づいてくださいと言わんばかりの色なのかもしれせん。



No2.ダルマヒオウギ:
ヒオウギの園芸品種。草丈40cm位。

ヒオウギは日当たりを好みますが、土が乾燥する場所は嫌います。水はけが良く保水性のある土であれば、ほとんど肥料は入りません。このことから組み合わせをする際は、ヒオウギを囲むように、地際から葉が叢生するようなヘメロカリス（ニッコウキスゲの仲間）やムラサキツユクサなどの宿根草と混ぜて植えると良いでしょう。葉を平面的にしか広げることのできないヒオウギは、まわりの宿根草の葉のおかげで乾燥から身を守ることができます。

一つの花が咲き終わるごとに、しぼんだ花をくっつけたまま緑色の種袋が膨らんでいきます。秋になると袋が割れて、その中から黒光りする葡萄のような種が現れます。ヒオウギの種は、



No3.ダルマヒオウギ:
10月下旬。つやのある黒い種から、和歌に読まれる夜や黒の枕詞、「ヌバタマ」は、ヒオウギの別名。

風に吹かれて落ちた所が気に入りますと芽を出します。種を取り翌年まいても芽は出ません。何もしなくても地面のあちらこちらから、パツと開いた小さな扇の集団が踊るように現れます。この苗を移植するのが一番簡単な増やし方です。ただし、忘れた頃にとんでもない所から芽を出しますので、あせらず気長に待ちましょう。